

【瀧】たき

万葉の時代、瀧は急流・早瀬をいい、高いところから垂直的に落ちる流水を垂水[タルミ]といいました。この使い分けは時代を経て次第になくなり徐々に瀧が両者を総称するようになったようです。

瀧の語源は「滾[たぎ]つ・涌つ・激つ・沸る」と同根です。水が逆巻くという意味です。

瀧は、古くは水神の示顕、あるいは不動明王の化現として神聖視されてきました。

和歌では瀧を白布や白糸に、飛沫[しぶき]を白玉に見立てて、しばしば溢れる激しい思いなどに喩えて詠まれてきました。

俳句では涼を採り夏の季語です。

茶の湯でも豪快に暑気を払う銘として、あるいは茶掛一行「瀧直下三千丈」などで夏にお馴染みですね。

瀧を表わす銘には垂水・早瀬・布引・白布・白玉・瀧糸・白糸・瀑布・瀑泉・養老・華巖・那智・飛沫・飛瀑・滝の音・霽などが思い当たります。

季語は夏でも、瀧が最も「滾つ」のは雪解けの春でしょう。

妙高高原の苗名の瀧は夏は水量が少なく瀧裏まで入ることができます。春には凄まじい音を轟かせ、川幅いっぱいの水量のため容易に人を近寄せません。幾つもの大岩を越えて近づいた瀧下には舞い散る大粒の飛沫が春日に煌き虹をなし、その神秘的な美しさは白衣観音の水浴みを見る想いがしました。山は男性的でも瀧は女性的です。白く、美しく、神秘的な怖さがあります。

平安貴族は瀧が好きだったようで寝殿造には庭に造り瀧を設け、これに臨む建物を瀧寝殿・瀧殿と名づけました。

『伊勢物語』八十七段に登場する布引の瀧は、現在の新幹線新神戸駅のすぐ裏手にあります。駅から舗装道路を徒歩にても10分かかりません。

美しい瀧ですよ。駅をご利用の際は早めに行って乗車時間までの間にご覧になってはいかがでしょうか。

西暦717年から724年までの日本の年号は養老です。元正天皇が美濃国多芸郡、現在の岐阜県養老郡の養老の瀧への行幸を機に、霊亀三年を養老元年と改めました。

瀧を評して『続日本紀』には「美泉」「醴泉」という言葉が見うけられますが、播磨国・豊後国・肥前国の『風土記』には「酒泉」「酒水」「酒殿の泉」など酒の語が目につきます。しかし、奈良時代には酒泉伝はあっても孝子譚に仕立てた瀧の伝承は未だ見られません。

・昔、元正天皇の御時、美濃国に貧しくいやしき男ありけり。老いたる父をもちたりけるを、此男、山の木草をとりて、その價をえて父をやしなひけり。(中略)或時、山に入て薪をとらむとするに、(中略)石の中より水ながれいづることあり。其色酒ににたりければ、汲みてなむるにめでたき酒なり。うれしく覚えて、其後日くにこれをくみて、あくまで父を養ふ。時に、御門此こと

をきこしめて、靈龜三年九月に、其所へ行幸ありて御覧じけり。是則、至孝のゆへに天神、地祇あはれみて、其徳をあらはすと、かむぜさせたまひて、のちに美濃守になされにけり。その酒出でけるをば、養老の瀧と伝とぞ。

『十訓抄』六の十八より

このように養老の瀧伝説は鎌倉時代には孝子酒泉伝として伝えられました。謡曲『養老』もこの類に属します。

孝子酒泉伝とは、貧しくとも親孝行な息子が酒の湧く泉や瀧を発見し(天が孝行息子に授け)、親に与えて養生させるという話です。

もし、酒の湧く泉、酒の流れる瀧が本当にあればドブプリ身を沈めてみたいものです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~